### 土器の様相について

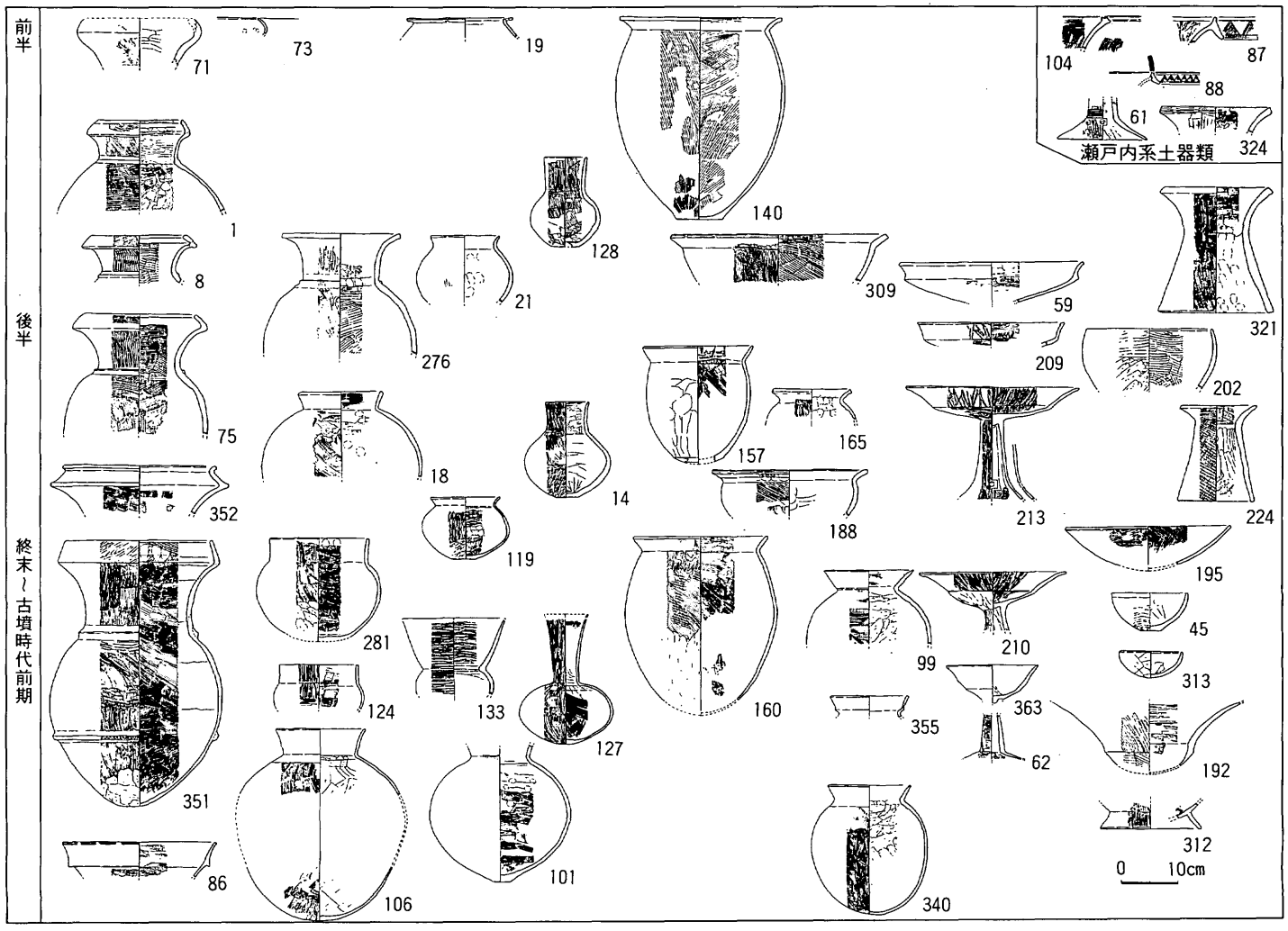
ここでは本文で366個体、観察表で破片を含め2,585個体を紹介している弥生土器について総括しておきたい。出土環境については前節で述べたとおりかなりの時間幅を持つと考えられるのであるが、学史における土器の時間幅はどうであろうか。福岡平野での弥生時代後期の土器相は森貞次郎氏が設定した前半＝高三潴式、中頃＝下大隈式、後半＝西新式が、形式の名称は別として大枠で認められている。本文中での時期の認識もこれに従っている。細かな型式的、時間的推移については常松1984・1985、岩永1989、溝口1988の分析を参考にしている。

複合口縁壺の口縁部の量的変化は上位層のSX001では後期前半の袋状口縁（表４－２の１、２）を１とした場合、後期中頃の袋状と「く」字形の中間形態（表４－２の４）は0.54、後期中頃から後半のく字形口縁が6.2（表４－２の３、５）、終末期の直立口縁（図24の86他）は0.4で圧倒的に後期の中頃から後半にかけてのタイプが量的に卓越している。下位層のSX001灰色砂層でも袋状口縁（表４－１の１）を１とした場合、後期中頃の袋状とく字形の中間形態（表４－１の３）は２、後期中頃から後半のく字形口縁が７、終末期の直立口縁は0.5とおおかたの傾向は変わらない。また、甕形土器の底部の推移はSX001では平底（表４－３の21）を１とした場合、後期中頃の平底に近い丸底（表４－３の22）は0.77、後期中頃から後半の丸底に近い平底が1.1（表４－３の23）、終末期から古墳時代前期の丸底（表４－３の22）は0.6で、後期中頃から後半のものが量的に多い結果となっている。全体としては壺と甕の型式で見た場合後期前半から古墳時代初頭まで、ある程度の継続性をもって土器が供給された様相が見られ、後期中頃から後半が量的なピークであった。

### 瀬戸内系土器について

特定の地域には限定できないが瀬戸地域の様相を持つ土器が５個体出土している。87、88、104は壺もしくは器台に、61は高坏、324は器台と考えられる。口縁部の横沈線やヘラ描きの連続三角文は在地にはない手法である。帰属する土器群の時間幅が永いため在地土器からの時期比定は困難であるが、山陽地域の編年を参考にすれば壺類は「酒津式」以前、後期終末以前のものと思われる。本遺跡から出土する畿内系の後期終末の土器群の出現に先立つものである。

九州における瀬戸内系の土器の流入は沿岸部を中心に弥生中期から見られ、後期後半から終末にかけてが最も多く、畿内系の布留式土器が在地化する時期まで流入する。畿内系や山陰系の土器が限定的ながらセットで流入し在地化するのに対して、瀬戸内系の土器はおおかたのものは単体で出土し、顕著には在地の土器のプロポーションなどには影響を残さなかったように思える。しかし、庄内平行期もしくは多少それに先立つ時期に本報告の165の甕、春日市唐梨遺跡４号土壙出土甕109のようにハケ手法一辺倒の伝統の中で、内面調整にケズリ手法が突然現れる現象などは、当該地域からの影響も視野に入れる必要があろう。




第78図　雛川遺跡出土弥生後期土器変遷図

第５表　瀬戸内系土器出土地名表

| | 遺跡名 | 市町村名 | 遺構 | 器種 | 時期 | 部位・使用 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 比恵（７次） | 福岡市 | 井戸 SE－02 | 甕 | 後期終末（下田所） | 完形 祭祀？☆ | |
| 2 | 板付Ｆ５ｄ | 福岡市 | 溝 SD－31 | 高坏 | 後期初頭 | ほぼ完形 | 「板付周辺遺跡・調査報告書（11)」福岡市教育委員会 1986 |
| 3 | 多々良・込田 | 福岡市 | 住居 6号 | 甕 | 古墳前期初頭☆（亀川上層） | 口～胴部☆ | 「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」福岡市教育委員会 1975 |
| 4 | 松の木 | 那珂川町 | 土壙 | 甕 | 後期終末（下田所） | 胴部 祭祀☆ | 「松本遺跡Ⅰ」那珂川町教育委員会 1984 |
| 5 | 九大筑紫地区キャンパス内 | 春日市 | 溝 SD－316 | 甕 | 〃 ？ | 口縁部 | 九州大学　西　健一郎氏　御教示 |
| 6 | 御床松原 | 志摩町 | 包含層 | 甕・他 | 中期・中頃 | 口縁部 | 「御床松原遺跡」志摩町教育委員会 1983 |
| 7 | 三雲・番上 | 前原町 | 住居 4号 | 甕 | 後期・後半（下田所？） | 口縁部☆ | 「三雲遺跡Ⅰ」福岡県教育委員会 1980 |
| 8 | 〃 | 〃 | 包含層 | 甕 | 後期・後半（鬼川市） | 口縁部 | 〃 |
| 9 | 三雲・鬼木 | 〃 | 〃 | 高坏 | 後期？ | 裾部欠損 | 「三雲遺跡Ⅱ」福岡県教育委員会 1981 |
| 10 | 横代 | 北九州市 | 〃 | 高坏 | 後期（鬼川市？） | 口縁部 | 「埋蔵文化財研究会第15回研究集会資料」第15回研究集会世話人会 1984 |
| 11 | 長野 | 〃 | 〃 | 甕・高坏 | 後期（鬼川市？） | 口縁部・坏部 | 〃 |
| 12 | 守恒 | 〃 | 土壙 | 高坏 | 後期（鬼川市Ⅰ） | 完形？ | 〃 |
| 13 | 前田山 | 行橋市 | 方形周溝墓周溝 | 甕 | 古墳前期初頭（亀川上層） | 口～胴部 | 「福岡県行橋市前田山遺跡の調査」（考古学ジャーナルNo.156） 1978 |
| 14 | 下藤 | 大分県野津町 | 方形周溝墓周溝 | 甕 | 古墳前期（亀川上層？） | 口縁部 | 「下藤遺跡」（野津川流域の遺跡Ⅴ）野津町教育委員会 1984 |
| 15 | 熊野原Ｃ（宮崎学園都市） | 宮崎県宮崎市 | 住居 SA－22 | 甕 | （下田所～亀川上層） | 口縁部 | 「熊野原遺跡」（宮崎学園都市発掘調査報告書第２集）宮崎県教育委員会 1985 |
| 16 | 苗代津 | 熊本県健軍町 | 包含層 | 甕 | （下田所～亀川上層） | 口縁部 | 九州大学　西　健一郎氏　御教示 |

※部位・使用欄中の☆マークは在地土器とのセットをなすもの。
時期欄中の（　）中は1977（川入）上東遺跡報告書（岡山県）に掲載の形式名称を当てた。

## 木製品について

本文中では杭も含め167点の木製品を紹介しているが、回収した杭や板材、チップの報告は部分的なものになってしまった。

今回出土した木製品は農具、漁労具、炊事具、容器類、靴、建築部材など多種にわたっている。図で示したようにこれらの大半が破損した状況で出ている。土器同様に廃棄された可能性が高いが、板材（407）や杭に見られるように再利用されたものも見られ、破損したものであっても再生産のための素材として低湿環境に恣意的に置かれていた可能性もないわけでない。カシの割材が共伴していることからもその可能性が指摘しうる。また、製品への加工もこの低湿地もしくは至近でおこなわれたと思われ、多くの木材チップが出土した。今後集落のエリアや「場」の復元作業に際して、集落に隣接する低湿地の位置づけが重要になってきている。